

発掘だより No. 16

平成3年12月21日(土) 豊川市教育委員会社会教育課 発行

赤塚山第1号墳の調査概要

赤塚山は、その名のごとく真っ赤な赤土に覆われた山で、赤塚の「塚」の字は、もしかしたら古墳のある山という意味でつけられたのかもしれませんが。

今まで赤塚山の古墳については、その実態がはっきりしていませんでしたが、今年秋に行った試掘調査で2基の古墳の存在が確認され、現在そのうちの一つ「赤塚山第1号墳」の発掘調査を実施しています。

I、周辺の遺跡

赤塚山は、国分寺の瓦窯があることでも知られており、西方約1.5kmの地には、三河国分寺や三河国分尼寺があります。

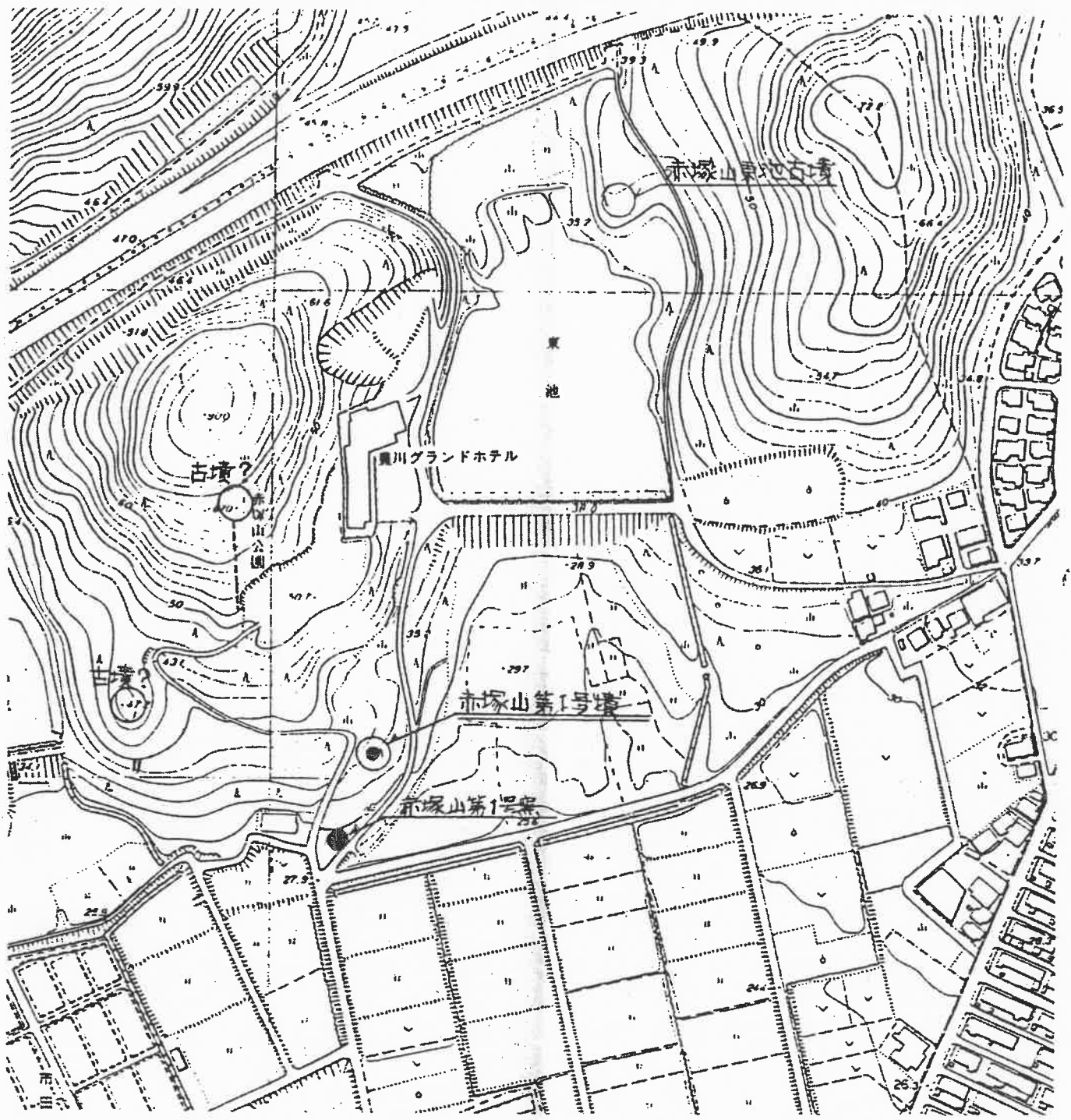
従来赤塚山古墳は、山頂近くの「鳥居強右衛門勝商」の碑のあたりといわれてきましたが、試掘調査により、この赤塚山登り口右手と東池北東の低丘陵から新たに古墳が確認され、それぞれ赤塚山第1号墳、赤塚山東池古墳と命名しました。

赤塚山東池古墳は、6世紀の中ごろに造られた直径約15mの円墳で、赤塚山第1号墳よりは少し古い古墳です。また、この他にも赤塚山周辺には古墳がいくつか存在する可能性があります。

II、赤塚山第1号墳の概要

1、構造

赤塚山第1号墳は、7世紀代に築造されたと推定される直径約15mの円墳で、赤塚山南麓の斜面に尾根状の地形の先端を利用して造られています。



赤塚山周辺の地形図と遺跡の位置

内部主体は横穴式石室で、当初は壁も天井もすべて石で組み、今よりもっと高まりのある古墳だったと推定されますが、残念ながら鎌倉時代に石の多くが抜き取られ、副葬品もほとんどが持ち去られています。

ただし石室自体は、この時期の円墳としては比較的規模の大きなしっかりした造りで、床面の敷石や、かろうじて残った奥壁及び側壁から、当時の石室の様子をうかがうことができます。

また、墳丘の斜面には、葺石がふかれていたことがわかります。

2、出土遺物

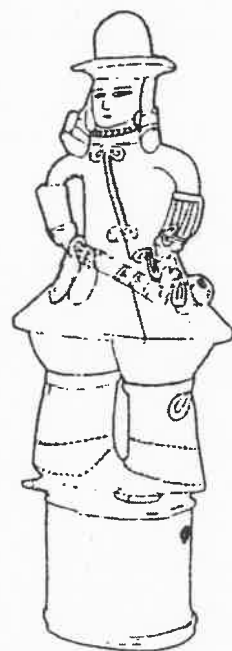
奥壁手前の東寄り床面から、13cmほど離れて2個の耳環（金環）が出土しました。その出土状態から、頭を北に向け、ここに死者の棺が置かれた可能性が考えられます。また玄室入口付近から、人骨の一部も出土しました。

このような横穴式石室の場合、追葬が行われることが多く、被葬者は一人とは限りません。

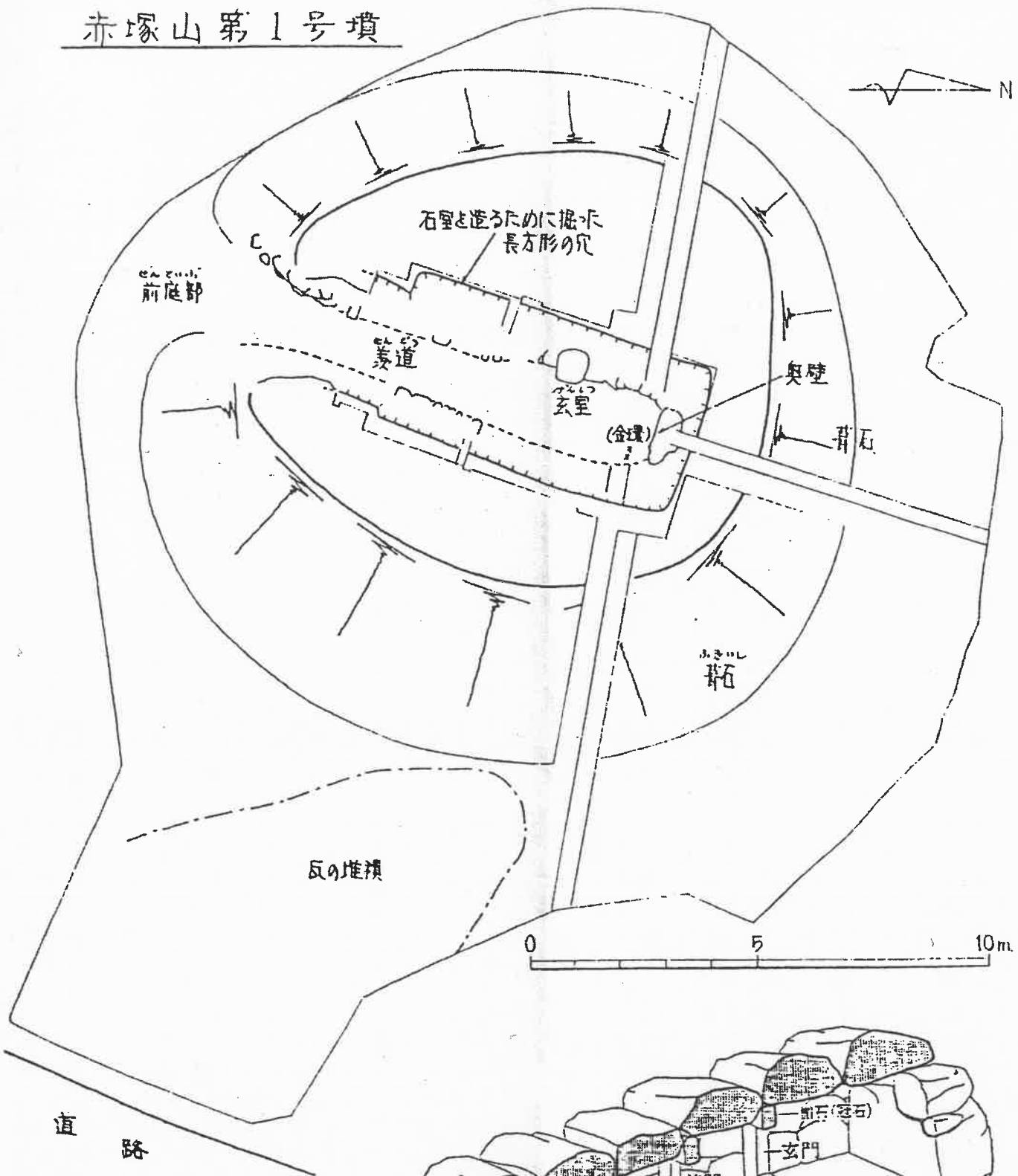
なお、床面の土をふるいにかけてところガラス小玉が数点出土し、また前庭部からは須恵器の坏蓋、壺などの破片が、石室埋土からは鉄器の破片や山茶碗、かわらけ、土鍋などが出土しています。

※耳環は、銅地に薄い金をかぶせたりメッキしたもので、切れ目をみみたぶに挟み込んでつけました。またガラス小玉は、首飾りに用いたものと推定されます。

埴輪にみる古墳時代の武人の姿→



赤塚山第1号墳



横穴式石室構造模式図

III、赤塚山古窯

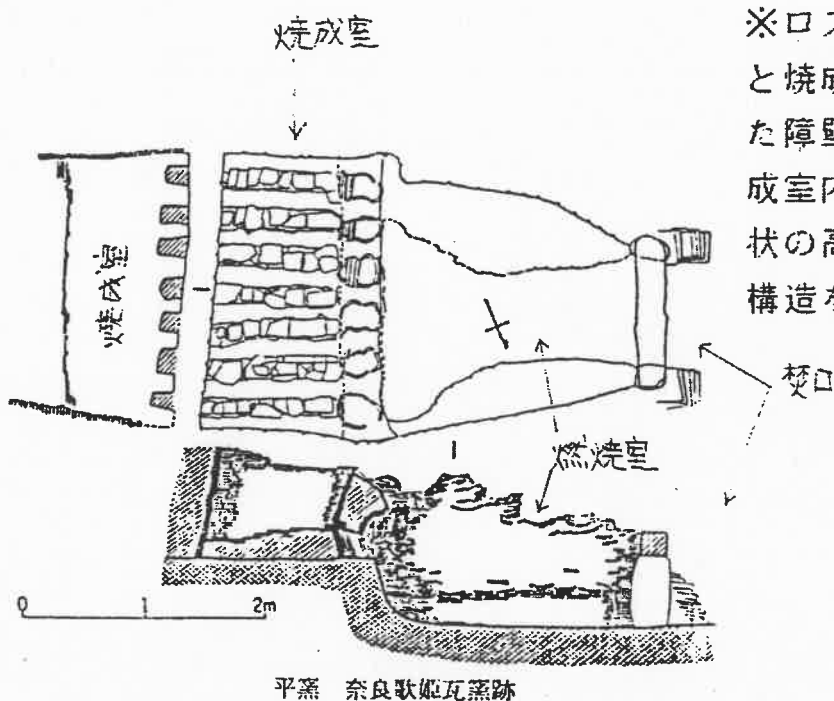
赤塚山南麓から布目瓦がでることは古くより知られ、三河国分寺の瓦を焼いた窯だと考えられてきました。

昨年夏に行った試掘調査の結果、ちょうど赤塚山登り口右手の瓦窯の碑のあたりに瓦窯があることが確認され、やはり国分寺や尼寺の瓦を焼いた窯であることが実証されました。

ただし出土した軒瓦をみると、創建時の瓦ではなく奈良時代末～平安時代の瓦であり、国分寺や尼寺の修理や建て替えの際に用いた瓦を焼いた窯であることが判明しました。

確認された赤塚山第1号窯の構造は、登り窯ではなく平窯（ロストル式）であり、豊橋市牟呂町の市道1号窯と同じく、瓦専用の窯として使われたものです。

赤塚山第1号墳の麓からも瓦の破片がかなり出土しており、このあたりにも瓦窯の存在する可能性が考えられます。



※ロストル式平窯は、燃焼室と焼成室の間が通焰孔のあいた障壁によって区切られ、焼成室内には、うねのような数状の高まりをもうけた特殊な構造をもつ。

平窯 奈良歌姫瓦窯跡

